

代表取締役
内田 信康 氏

株式会社 インテックス

<https://in-tex.co.jp/>

本 社：長崎県長崎市幸町6番3号

TEL. 095-826-2200

創 立：1964年(昭和39年)

代表取締役：内田 信康

取得認証



100000 (00)



もとき しょうぞう

本木昌造が切り拓いた長崎の印刷文化を受け継ぎ、
長崎で若人の舞台を造る

長崎市中心部に本社を構える株式会社インテックスは、オンデマンド機から輪転機まで保有し、プランナー、デザイナー、カメラマンが所属する企画デザイン部門をもつ総合印刷会社である。長崎の印刷人として印刷にロマンを追い求め、一代で県内はもとより、九州でも有数の印刷会社に育て上げた代表取締役の内田 信康氏に、若い社員に対する舞台造りのひとつとして、昨夏に導入したタンデムパーフェクターについてお聞きした。

先人に恥じない、
長崎の印刷文化を受け継ぐ

「印刷に携わるようになって絶えず考えてきたことは、印刷によっていかに長崎に貢献していくかである。いつも思考の原点にあるのが日本における活版印刷の創始者である、本木昌造翁だ。本木は将来の印刷を見据えて長崎で活躍したが、私も印刷にロマンを抱いて長崎で印刷一筋にやってきた」(内田社長)。同氏が2010年に藍綬褒章を授与されたのは、長年の印刷業界への貢献に加えて、本木昌造顕彰会を立ち上げて、書籍発行などを通じて、本木の功績を知らしめる活動に尽力したことが大きい。

「長崎に現存する当時の本を見ると、その時代が垣間見え、つつい当時を思いを馳せてしまう。私の原動力は後世に残る印刷物を手掛けたという強い想いだ。だからこそ、印刷の品質にはこだわり続けている」(内田社長)。本木昌造が印刷に携わるようになったのは、幕府の長崎鮑ノ浦製鉄所構内に活版伝習所を設けたことに始まる。それが現在の三菱重工長崎造船所だ。「ずっと以前から三菱の印刷機には興味があったものの、なかなかタイミングが合わな

かった。今回、RMGTの印刷機を導入して、縁ができたことは非常に感慨深い」と、内田社長は本木昌造との縁を振り返る。

地方だからこそ、何でもやる

内田社長の名刺の一番上に、「印刷文化と情報ネットワーク」と書かれている。真意を問うと、「後世に残る印刷物を手掛けることと同じくらい重要だと考えているのが、商業印刷における情報伝達をいかに速くする

かだ。今でこそ高速道路のお陰で他県からのアクセスが良くなったが、長崎は入り江が多く、印刷を含めて物流に時間を要する。一方で、情報化はますます進み、商業印刷は要らないと言われかねない危機感をひしひしと感じていた。また、都会では当たり前の方業も地方ではなかなか成り立たない。枚葉から始めた事業も、オフ輪を入れ、CTPや中綴じ、そしてフィルムラッピング等を導入して、印刷前後の効率化を図ってき



圧倒的な生産性と高印刷品質を誇る V3000TP-8 + LED-UV

WORKS

実績紹介



制作した印刷物の
展示コーナー▶



(写真左)
長崎稲佐山フォトコンテスト
2016 ポスター

(写真右)
インテックスで印刷した
「世界で最も美しい本展(2005年)最優秀賞受賞
「日本の近代活字一本木昌造とその周辺」
発行：NPO 法人近代活字文化保存会(長崎県印刷工業組合内)

たのは、私にとっては必然だった」と、内田社長は長崎で総合印刷を究め続ける。印刷機の導入においても、短納期対応を重視してワンパス両面フルカラーにこだわったのも、同様の理由だ。後世に残る印刷物を志向する上で、表裏見当が良いタンデムパーフェクターの導入は欠かせなかった。

必然の タンデムパーフェクター導入

こうして2016年の夏に、B1サイズ8色両面専用機タンデムパーフェクター(以下、TPと記載)V3000TP-8+LED-UVを導入した。「新社屋を建設するにあたり、工場の中核となるべき印刷機として、LED-UVを搭載したTPを選定することに迷いはなかった。



TPを担当する山田さん(手前)と松永さん(奥)

当社には既に、菊全8色反転の枚葉機があり、反転機と両面専用機とを使い分けることによって相乗効果が狙える」(内田社長)。結果的に、2台あるオフ輪の1台をTPに更新することになった。もともと生産能力が高いTPにLED-UVとロールフィーダーがプラスされることで、オフ輪に取って代わられる生産能力があると評価している。同社ホームページには「B1ポス



ロールフィーダーで連続給紙する V3000TP-8+LED-UV

ターの印刷も可能」最新鋭、大量ロット・高速印刷機「裏面印刷後に反転することなく表面印刷を行うため、表裏の印刷品質の差がない高品質な印刷が可能です」とTPを紹介しており、クライアントに対するTPの訴求ポイントが明確だ。

目論見通りの活躍

技術的なこと、特に初めてUV機を導入したことについて、「UVは初めてなので、RMGTやインキメーカーに勉強会を開いてもらうなど研究を重ねて、導入前に周到に準備した。



取締役生産本部長
こじま まさよし
児島 正嘉氏

ところが実際に印刷してみると、予想に反してそれほど苦勞せず軌道に乗せられた」と取締役生産本部長の児島正嘉氏は振り返る。今年(2017年)12月公開予定の映画のポスターの山を見ながら、「UVだからと言って、光沢には全く不満はない。TPは網点がりっきりしているので、難しいデザインのポスターの仕事もうまくこなして、リピートも多い。今後は油性も含めて、このTPで刷ったチャートを社内標準とする予定だ」と、児島本部長はTPの品質に信頼を寄せる。「このTPは、ロールフィーダーで連続給紙され、LED-UV乾燥装置によって即乾されて排紙されるため、あまり手がかからない」と同氏は言う。確かに取材時には、TPを担当する二人のうち、近くで作業していたのは松永さんだけで、山田さんは離れた場所

自分の役目は若人の舞台造り

企画・デザイン部門には、3名のカメラマンが所属している。長崎稲佐山フォトコンテスト2016で大賞を受賞した松原カメラマンを評して「いい写真を撮るでしょう。あの福山雅治がえらくホメとったよ。でもね、ああ見えても頑固でね」と内田社長はうれしそうに話す。社長室のそばに、同社が制作した印刷物を美術館のように展示する一画がある。そこに受賞写真が飾られているが、「最高の一枚、ありがとうございます。」と福山雅治氏の直筆サインが添えられている。内田社長は続けて、「自分の役目は、当社で働く人に自分の力を発揮できる舞台を造ることだと思う。最近、若い人が将棋や卓球で活躍する姿は生き生きしていて、こちらも元気を貰う。当社で働くみんなにもそうなってほしい。その姿を見たいために、新社屋も建て、新しい機械も導入した」。

「しかし、私はペーパー(紙に印刷する仕事)まで。デジタルは若い人が思うようにやればいい」と、内田社長は笑顔で語った。デジタル分野では、360度の動画が現れる洗練された同社ホームページは、若い同社社員が制作している。カメラマンを自前で抱え、洗練させたデジタルコンテンツを展開できる制作力と、TPを中心とした生産力が組み合わせられて、さらなる発展が期待される。

リョービMHIグラフィックテクノロジー株式会社
西日本営業部 西日本営業二課
平野 英典(写真左) 森林 英王(写真右)

内田社長のお考えにピッタリあったTPを最適な仕様で納入できたことが非常にうれしいです(平野)。20年以上通って、今回初めてTPで念願が叶いました。今後も様々な機械や資材のご提案をさせていただきますので、末永くよろしくお願ひします(森林)。

